

乳癌の若年発症は臨床病理学的因子とは独立した予後不良因子である

片岡 明美（がん研究会有明病院）

【目的】

日本乳癌学会全国がん登録データベースにおいて、若年での乳癌発症が独立した予後因子となるか否かを明らかにする。

【対象と方法】

2004年から2006年の間に登録された53,670人の乳癌患者のうち、5年後の追跡予後調査が行われた25,898人（48.3%）を対象に、若年（YA; <35歳）、中年（MA; 35-50歳）、および高齢者（OA; >50歳）の3群に分け、臨床病理学的因子と5年無増悪生存期間（DFS）および全生存期間（OS）率を比較した。

【結果】

YAは、MAおよびOA患者と比較して、ステージが進行しておりHER2陽性が多くエストロゲン受容体（ER）陰性が有意に多かった（ $P < 0.001$ ）。5年DFSと5年OSは、YA、MA、およびOA患者でそれぞれ79.4%と90.8%、88.5%と95.0%、87.8%と91.6%であった。多変量解析でも、若年発症は、DFS（ハザード比1.73、95%信頼区間1.42-2.10; $P < 0.001$ ）とOS（ハザード比1.58、95%信頼区間1.16-2.15; $P = 0.004$ ）に対する独立予後因子となった。

【結論】

若年発症は、乳癌の独立した予後不良因子となった。若年性乳癌のための新規治療戦略の開発が必要である。